

平成二十六年 国 語 問題用紙

注 意

- (1) 放送による指示があるまでは、問題用紙に手をつけてはいけません。
- (2) 「やめ」といわれたら、すぐにやめなさい。
- (3) えんぴつまたはシャープペンシル、消しゴムだけを机の上に出しなさい。
- (4) えんぴつや消しゴムなどを貸したり借りたりしてはいけません。
- (5) 何か質問があるときや物を落としたときは、声を出さずに静かに手をあげなさい。
- (6) 解答用紙は、机の中央に置いて書きなさい。
- (7) 問題は【一】から【三】まで、16ページあります。

答えを書くときの注意

- (1) 答えは、解答用紙の示されたところに、はっきりと書きなさい。わくからはみだしたり、読みにくい字を書いたりしてはいけません。
- (2) 答えは、とくに示されているほかは、問題の後にあげてある中から一つだけ選んで、ア、イ、ウ……などの記号で書きなさい。

【一】放送を聞いて、後の問いに答えなさい。

図1

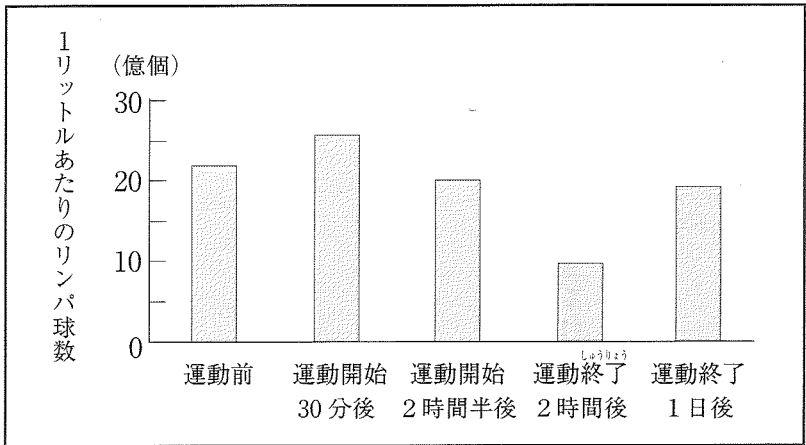
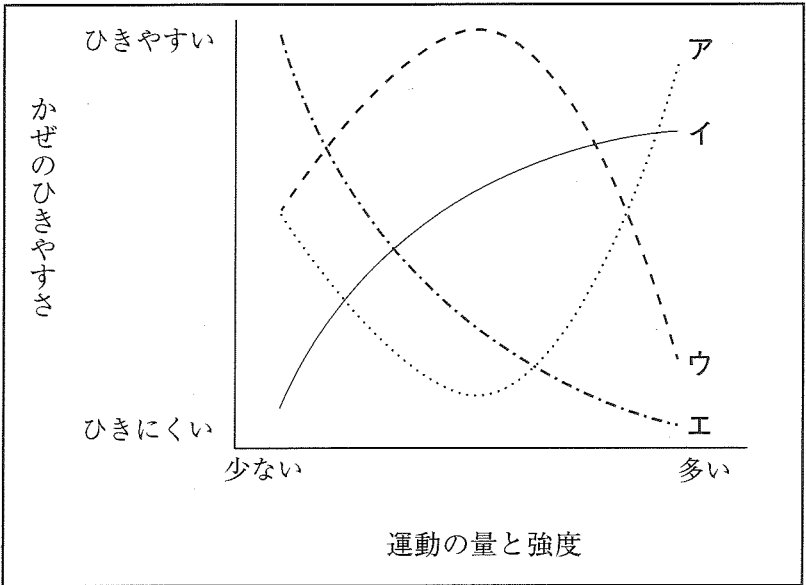


図2



- 1 -

(1) (問題は放送で指示します)

ア 運動によって白血球が細菌やウイルスとたたかう機会が増えるため、運動している間は減少する。

イ 運動によって低下した身体の機能を白血球が補おうとするため、運動している間は増加する。

ウ 運動によってダメージを受けた組織に血液中の白血球が移動するため、運動終了後は減少する。

エ 運動によって身体の各組織で眠っていた白血球が血液中に移動するため、運動終了後は増加する。

(2) (問題は放送で指示します)

(3) (問題は放送で指示します)

ア スポーツマンの身体が強いとは限らないという自覚を持つとともに、眠っている白血球を活性化するような激しい運動を続けていくこと。

イ 激しい運動の後には速やかに汗をふいて着替えるなどの予防策を行っていくとともに、運動して楽しいと感じる運動を続けていくこと。

ウ 急に激しい運動を行うのではなく、少しずつ運動の強度を上げていくよう調整していくとともに、苦しさを感ぜない運動を続けていくこと。

エ たとえ試合前であっても激しい運動の合間には必ず休憩をとるようにするとともに、仲間と楽しみながらできる運動を続けていくこと。

(谷本道哉『スポーツ科学の教科書―強くなる・うまくなる近道』をもとに作成)

- 2 -

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日、小学校から帰った「私」（ひばり）は、同居する祖母「すみれちゃん」の部屋に初めて招き入れられた。すみれちゃんは「私」に口止めをしてから、かぶっていたよそゆきの帽子を持ち上げた。

すみれちゃんが時間をかけて帽子を取ると、頭の上にこんもりと束ねられたお団子頭が出現した。すみれちゃん定番のヘアスタイルで、後ろから見ると、お正月に飾る鏡餅そっくりに見える。

それにしても、ただの一本も黒い毛がまじらない、Aキントウに白いすみれちゃんの髪の毛は、お祭りの屋台で売られている綿菓子（わたがし）を連想させる。じっと間近で見ていると、なんだか舌の上にのせてみたいような衝動（しょうどう）にかられ、どこからともなくじんわり生唾（なま唾）がわき出てくる。

ところが、すみれちゃんは私のすぐ目の前で、そのお団子頭に、ある物をそつと差し込んだのだ。どこからどう見ても、何度目（なんどめ）をしばたかせても、それは熱を測る時に使う体温計（たいひんけい）に間違いない。

驚（おどろ）くと同時に、不安になった。すみれちゃん、熱でもあるのかしら。ただ、脇（わき）の下やベロの下で体温を測ることは知っているけど、髪の毛の中というのは初めて見る。うすうす感じてはいたけれど、やっぱり、昨日までのすみれちゃんとは、どこか様子が違う。

「お願いしてもいいかしら？」

体温計から目をそらすと、鏡の中のすみれちゃんとはつちり目が合った。私のことを、強い眼差（まなざ）しで見つめている。

「ひばりさんに、何度になるか、見てほしいのです」

私は、すみれちゃんに言われた通り、髪の毛につきさしてある体温計を見つめた。すみれちゃんがずつと片手で支えているのが辛（つら）そうなので、私が代わりに体温計を持つ。膝（ひざ）の上に手を戻したすみれちゃんは、大事な結果を待つみたいに、そつとまぶたを閉（と）じた。少し、緊張（きんちょう）しているのかもしれない。薄いまぶたが、風になびく絹（きん）みたいにくびくと震（ふる）えている。

まさか。

私はさつきからもやもと胸を支配（しはい）しつつある不安を、がんばって追い払（はら）った。同級生のおじいちゃんがぼけてしまい、老人ホームに入ったというのはつい先週（しゅう）のことだ。① だけど、すみれちゃんに限（かぎ）って……。もしも万が一（いっしょういち）そんなことになったら、私も一緒（いっしょ）

に老人ホームまでついていこう。

なんとか気持ちをなだめながら、すみれちゃんのお団子頭にさしてある体温計の水銀柱（すいぎんしゅう）が止まるのを静かに待つ。家や学校の保健室で使うのはデジタル式の体温計だけど、物を大切にすすみれちゃんは、まだ旧式の古い体温計をそのまま使っている。デジタル式だったら音が鳴って知らせてくれるけど、旧式のは水銀の動きが止まるのを待つしかない。止まったのを確認（かくにん）してから、銀色に光る目盛りを読み上げた。

「三十六度、九分」

「どうもありがとう、ひばりさん」

すみれちゃんはひっそりと、けれどしつかりとした意思のこもった声で告げる。その声で、私はついさっきの自分の想像が、考えすぎだったとわかる。すみれちゃんに限って、そんなことはありえない。間違いなく、いつも通りのすみれちゃんだ。② すみれちゃんのことなら、私が一番よく知っている。

すみれちゃんは髪の毛から体温計を抜き取ると、椅子（いす）に座（すわ）ったままぶんと体温計を振（ふ）った。目盛りを確かめ、また元の引き出しの中に戻す。もしかしたらさっきの方法は、昔のやり方なのかもしれない。赤ちゃんの体温を測る時はおしりの穴に入れて測るって聞いたことがあるし、まだまだ私の知らない体温の測り方があるのだろう。

そう思った時、すみれちゃんがまた、頭の上のお団子に両手を伸ばした。今度はお団子を左右にかき分け、中を広げようとする。

「ご覧になって」

一体、どういうことなのかさっぱりわからなかった。

それでも言われた通りに、少し背伸びをするような格好で、すみれちゃんの頭（かぶ）のてっぺんをのぞき込む。すると、ちょうどつむじあたりに、薄桃色（うすももいろ）をしたパタパタがのっかっていた。

また、私の頭にぽかんと疑問符（ぎもんぷ）が浮かぶ。どうしてそこにパタパタが置かれているのか、すみれちゃんは一言も教えてくれない。その代わり、すみれちゃんはそのパタパタを、片手でゆつくりと持ち上げた。パタパタというのは、夏、汗疹（あせも）ができないようお風呂（ふろ）上がり（あがり）の肌（はだ）に天花粉（てんかふ）をつける時に使う、綿（わた）のかたまりのような丸くて柔らかい道具のことだ。一見（いちけん）大きめのマシユマロのように見えるそれが、正式に何（なに）というのかわからなくて、私もすみれちゃんも、パタパタと呼んでいる。

「ぴひゃあ」

たて笛（ふえ）を口にくわえたまま豪快（ごうがい）にくしゃみをしてしまった時のような、変な声が飛び

出した。

「親鳥さんが、抱卵を止めてしまったみたいなのです」

すみれちゃんがつぶやく。

「ほうらん？」

私は、たった今すみれちゃんが口にした、耳慣れない単語を繰り返した。薄桃色のパタパタが置かれていたすぐ下、すみれちゃんをつむじのちょうど真上あたりに、小さくて丸い物がのっている。私は自分の見間違いかと思つて、猫がよくするみたいに指先で目をゴシゴシこすった。でもそれは、何度まばたきしてみても、どこからどう見ても卵だ。

最初はすみれちゃんの天然白髪に同化してよくわからなかったけど、すみれちゃんの柔らかな髪の毛が巣になって、卵を包み込んでいる。ニワトリの卵ほど大きくはないけれど、ウズラの卵のような斑点もない。子どもたちの間で、そんな形のチョコレートが流行っていた。ふとひらめいて、私は言った。

「ずいぶんお上手に作ってあるチョコレートね」

チョコレートだったら、そのままにしておくと、やがてすみれちゃんの体温で溶けてしまうかもしれない。チョコレートが溶けるのは構わないけど、すみれちゃんのせっかくの白髪が、チョコレートで台無しになってしまうことが心配だった。すると、

「違いますのよ、ひばりさん」

すみれちゃんは、ぴしゃりと言った。将棋の名人が、王手をさす時みたいな言い方だった。

「これはね、お菓子ではございませんの。ほんものの、鳥の卵なのです」

すみれちゃんは、ほんもののをことさらに強調した。

すみれちゃんは、絶対に嘘をつかない。だから私はすぐに、それが真正正銘、本物の鳥の卵であると納得した。

最初は髪の毛にまぎれていたせいでわからなかったけど、卵は全部で三つある。すみれちゃんは、驚いている私を尻目に、ふふふふふ、と穏やかな笑みを浮かべた。すみれちゃんが、貴族だか華族だかの高貴な生まれである、というのをなんとなく信じる気持ちになるのは、この独特な微笑みに出合う時だ。

「なんの鳥なの？」

牛乳のような純白ではなく、生クリームみたいな奥行きのある白さの卵だ。

「つい先日、とっても大きな台風が来ましたでしょう？ それに驚いて、親鳥さんが逃

げ出してしまったみたいなのです。おとといからずっと巣箱を見張っているのですけどね、もう限界のようなのです。朝からカラスが狙っておりまして、先ほど、責任を持つて、わたくしが育てることにいたしましたの。産卵から何日かは、四六時中温めなくても、すぐに死んでしまうことはありませんからね。この卵には、まだ希望が残されております」

すみれちゃんの言う希望とは、ヒナが誕生することを意味するのだろうか。けれど私には、この小さくて儂げな球体の中に鳥の素となるものが詰まっただけで、それがやがて本物の鳥になるかもしれないなんて、うまく想像することができなかった。

結局すみれちゃんは最後まで、どういう鳥の卵なのか、明かさなかった。④もしかすると、すみれちゃん自身、それを知らないのかもしれない。

黙って卵に見入っていると、すみれちゃんは再び鏡台の引き出しを開け、今度は中から細い色鉛筆のような物を取り出す。お化粧の時に使う道具のひとつかもしれない。

「ひばりさん、また手を貸していただけるかしら。このペンシルで、卵の表面に何か印を描いてほしいのです。わかりやすいように、三つそれぞれ別のマークだと助かります。これから毎日、てんらんしますから」

またもやすみれちゃんの口から、聞き慣れない言葉が飛び出す。展覧会のでんらんだろうか。でも、なんだかちよつと違う気がした。黙っていると、すみれちゃんが優しい声で教えてくれる。

「てんらんっていうのはね、卵を転がすことなの。卵全体をまんべんなく温めるために、卵の向きを変える必要があるの。よく、親鳥がおなかの下で卵を転がしていますでしょう？ 本来なら、親が自然にそれをするんですけどね。今回は、人工ふ化になりますから」

私は、すみれちゃんに言われた通り、卵の表面に、絵を描こうとした。けれど、少しでも力を入れると卵にひびが入ってしまいそうで、怖くて全然力が入らない。一瞬だけ指先に触れた卵は、ほんのりと生温かくて、なんだか柔らかいように感じた。なるべく強く触らないようBサイシンの注意を払いながら、なんとかがんばって、三つ全部に印をつける。

ひとつ目の卵には「☆」を、ふたつ目の卵には「○」を、みつつ目の卵にはちよつと迷ってから「〒」を記した。だって、「○」の次に「×」を描いたら、縁起が悪いと思つたのだ。作業を終えると、緊張していたのか、手のひらにじわじわ汗がにじんでくる。

「ごくろうさまでした」

すみれちゃんは手探りでパタパタを元の位置に戻すと、ていねいにお団子の形を整えた。

なるべく、すき間風が入らないようにしているようだった。お団子をつぶさないように気をつけながら帽子をかぶると、そこに鳥の卵が隠されているなんて、誰の目にもわからなくなる。

こうして、私とすみれちゃんとの、卵を温める日々が始まった。

すみれちゃんは本物の親鳥になりきって髪の毛の巣で卵を守り、私はすみれちゃんの助手として最大限のサポートをする。()

ことが、私たちに与えられた最大の使命となった。

(小川糸『リボン』による)

- 7 -

(1) 線部「四六時中」の意味を五字以内で答えなさい。

(2) 線部①「もしも万が一そんなことになったら、私も一緒に老人ホームまでついていこう」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 「すみれちゃん」のことが心配なので、できるだけそばにいて見守ってあげようという気持ち。

イ 「すみれちゃん」の様子がいつもと違うことに気づくのがおくれたので、後ろめたく思う気持ち。

ウ 「すみれちゃん」が迷子になっては困るので、自分が見張っていないといけないという気持ち。

エ 「すみれちゃん」とこのまま別れるのはさびしいので、つらさをまぎらわせようとする気持ち。

(3) 線部②「すみれちゃんのことなら、私が一番よく知っている」とありますが、この表現から「私」のどのような様子が伝わってきますか。次の中から最も適当なものを選びなさい。

ア 「すみれちゃん」についてかんちがいでしまったことを後悔する一方で、自分の考えはやはり正しかったと自信を取りもどしている様子。

イ 「すみれちゃん」はいつもと全く変わっていないと知って安心し、「すみれちゃん」に異変があったと早とちりした自分をなぐさめている様子。

ウ 「すみれちゃん」の行動を一瞬でもおかしいと思った自分を反省し、もう二度と「すみれちゃん」を誤解したりなどしないと思心にかかっている様子。

エ 「すみれちゃん」に何もなかったとわかって落ち着きを取りもどし、もし本当に何かあったら真っ先に気づいたはずだと自分に言い聞かせている様子。

- 8 -

(4) —線部③「ほうらん」とありますが、この言葉をひらがなで書くことでどのようなことが表現されていますか。次の中から最も適当なものを選びなさい。

ア「すみれちゃん」の頭に見慣れないものを発見した「私」が、自分の見たものが信じられずにとまどっているということ。

イ「すみれちゃん」が発した声が小さすぎて「私」にははっきりと聞き取れなかったもので、もう一度聞き直そうとしているということ。

ウ「すみれちゃん」が思いもよらないことを口にしたので、先ほど「私」の頭をよぎった不安がまたよみがえってきているということ。

エ「すみれちゃん」の言った言葉が今まで聞いたことのないものだったので、「私」には意味がよく理解できないでいるということ。

(5) —線部④「もしかすると、すみれちゃん自身、それを知らないのかもしれない。」とありますが、このことから「私」のどのような考えがわかりますか。次の中から最も適当なものを選びなさい。

ア「すみれちゃん」がどういう鳥の卵なのかを知っていても知らなくても、それはたいして重要なことではないだろうと考えている。

イ「すみれちゃん」自身も実はどういう鳥の卵なのかを知らないのではないかと気づき、それを隠そうとしているのだろうと考えている。

ウ「すみれちゃん」はこういう鳥の卵なのかを知っているが、そのことを「私」に言う必要はないと判断しているのだろうと考えている。

エ「すみれちゃん」自身も実はどういう鳥の卵なのかを知らないと知り失望する一方で、そこまで専門的な知識は不要だろうと考えている。

(6) 文中の() には、どのような言葉が入りますか。適当な言葉を考えて、五字以上十字以内で答えなさい。

(7) この文章において、「すみれちゃん」と「私」との関係はどのようなものとしてえがかれていますか。次の中から最も適当なものを選びなさい。

ア「すみれちゃん」は心が澄んでいて子どものように純粋な人なので、「私」とは共通の話題で盛り上がるなど、同級生の友達どうしのように和気あいあいと語り合っている。

イ「すみれちゃん」は孫の「私」から見ても独特の世界をもっている人なので、「私」はその不思議な雰囲気(ふんいき)にひきつけられるとともに、「すみれちゃん」に信頼を寄せている。

ウ「すみれちゃん」は好奇心旺盛で新しいものをいち早く取り入れる人なので、年齢的にかなり離れている「私」とも意気投合し、たがいになくてはならない存在となっている。

エ「すみれちゃん」は一見やさしそうに見えて「私」に対しては厳しく接する人なので、「私」は「すみれちゃん」の機嫌をそこねないように注意しながら、慎重に対話している。

(8) この文章の特色を述べたものとして適当でないものを、次の中から選びなさい。

ア 登場人物の間でかわされた会話や出来事をそのまま書いている部分と、「私」が思ったことを書いている部分とが交互に表れる。

イ 事物の様子を表す「こんもりと」などの言葉やたとえの表現を多く用いることにより、情景を具体的に思いうかべやすくなっている。

ウ 過去のことを回想している場面と現在のことをえがいている場面との間を行ったり来たりしながら、徐々にストーリーが展開している。

エ「すみれちゃん」が現在の状況や自分の思いなどに関してくわしく述べていない点を、「私」の想像などで補いながら話が進行していく。

(9) 文章中のAキントウ・Bサイシンを漢字に直しなさい。(ハネやハライなどの点画もきちんと書くこと)

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次のようなことを想像してみよう。あなたが座った食卓には、生のコメやコムギが載っている。その隣には、ウシとヒツジの生肉が置いてある。その向こうには、生のままの甲羅の光ったカニが皿に積まれている。いただきますと言って、食べてみよう。生きるか死ぬかの空腹でないかぎり、一口も食べられないかもしれない。ところが、火を使うだけで、これらは、まったく別の豪華な食べ物に変身する。多くの人はそう思ったことはないかもしれないが、調理は一種の「錬金術」なのだ。

これが火の第五の利用法だ。火を調理に使うのである。まずは殺菌作用だ。野生の動物の生肉には病原体や寄生虫がいることが多いが、それらを熱で殺せる。生水もそう。生水は、濾過したとしても、病原体や寄生虫の卵が入り込んでいることが多い。しかし、煮沸すれば、それを安全に飲むことができる。

しかも火は、食べ物の性質を変える。味やにおいが変わり（その香ばしさが食欲をそそるようになる）、消化もしやすくなる。また、火であぶったり煙でいぶしたりすれば、すぐ腐るはずの肉が長持ちし、貯蔵も可能になる。このように保存がきけば、それを携行することもできるようになる（これは遠出する者には大きな恩恵をもたらした）。同じことは植物にも言える。植物も、煮たり、焼いたり、蒸したりすると、多くの場合は食べやすく、消化もしやすくなる。

このように、**I**・煮る・蒸す・**II**といった火による調理がなければ、私たちの現在の多彩な食卓というものがあえなかっただろう。（ちなみに、英語のクック「料理する」という動詞は、火による熱を通すことにしか使えない。サラダを作るのも、刺身にするのも、寿司をにぎるのも、クックではない。動詞はメイク「つくる」を使う。）しかし、火による調理がなかったら、多彩な食卓だけではなく、私たちの脳もなかったかもしれない。そう主張するのは、ハーヴァード大学の霊長類学者、リチャード・ランガムである。

実は、家畜の生肉と違って、野生の動物の生肉はひじょうに硬い。それを食べるには、相当な力で長時間噛んでいなければならない。つまり、私たちの祖先が動物の生肉を食べていたとすると、その食事には咀嚼のために長い時間がかかったはずだし、胃や腸など消化器官にかかる負担も大きかったはずである。**1**、火を通すと、この硬かった肉は柔らかく、消化しやすいものに変化し、摂取できるカロリーも格段に増す。

ヒトの脳は、実はエネルギーを驚くほど多量に消費する。重さからすれば、身体

2%しかないのに、身体全体が消費するエネルギーのうち20%から25%を食う。この大食漢をどう養ったらいいか。最善の解決策は、栄養価の高い食べ物を食べること、そして効率のよいエネルギー摂取をすることである。加熱による肉の調理は、この二つの要件を満たしている。

ランガムは、私たちの祖先が二〇〇万年前頃に肉を火によって加熱処理することを始め、時間的にも労力の点でも効率的な食事を行えるようになったと考えている。というのは、その頃、私たちの脳の大きくなり（六〇〇cmから九〇〇cmに増える）、一方では、それまで重装備だった歯、顎や咀嚼筋が、華奢なものに変化しているからだ。咀嚼筋が弱くなったことによって頭蓋全体をきつく縛っていた筋肉の拘束は弱まり、これによって、脳は大きくなることができたのかもしれない。

しかも、調理した肉を食べることで、消化器系にかかる負担を大幅に減らすこともできた（実際、ヒトの消化器系は、同じ体重の霊長類から予想される消化器系の60%の重さしかない）。その結果、消化器に割っていた負担の一部を脳のほうに割り当てることが可能になり、しかも調理された肉食によって脳への多量のエネルギー供給も可能になった。ランガムはそう推測する。**2**、火が私たちの大きな脳を作ったことになった。

ただ、ランガムにはあいにくだが、二〇〇万年前にヒトが恒常的に火を使用していたという証拠は、今後見つかる可能性があるにしても、いまのところ見つかっていない。とは言うものの、火の使用が、私たちホモ・サピエンスの食事、脳や消化器、そして頭蓋や歯の形と密接に関係していることはおそらく間違いないだろう。

一万年ほど前から始まる農耕も牧畜も、火があつてのことである。火が使えるという前提がなければ、つまり煮炊きや焼いたりすることができなければ、ムギもコメもトウモロコシもジャガイモも、そして家畜の肉や骨も、美味な料理に変身することはなかったはずである。

蛇足を加えると、火による調理には別の副産物もある。食事と消化にかける時間が短くて済むようになり、時間的に集中して食事をとることができるようになる。ヒトの特性のなかに「決まった食事時間」があるが、一日二度や三度の決まった時間帯に食事をするというヒトの習性（文化的習慣の側面があるにしても）は、火による調理がもたらしたものだ。これによって、ヒトは、そこで浮いた時間をほかのことに使えるようになった。

（鈴木光太郎『ヒトの心はどう進化したのか―狩猟採集生活が生んだもの―』による）

注 *1 火の第五の利用法Ⅱこの文章ではこれより前に、火の利用法として「暖

房」Ⅱ「照明」Ⅱ「道具の加工」Ⅱ「動力」の四つが挙げられている。

*2 咀嚼Ⅱ口の中で食べ物をよくかみくだき、味わうこと。

*3 大食漢Ⅱたくさん食べる人。

*4 恒常的にⅡいつも。

*5 ホモ・サピエンスⅡヒトを生物として分類したときの呼び方。

(1) 1 . 2 に当てはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ次の中

から選びなさい。

ア そして イ つまり ウ また

エ いっぽう オ なぜなら カ ところが

(2) — 線部①「調理は一種の『錬金術』なのだ。」とありますが、「錬金術」とは、あ

りふれた金属を化学的に金（銀）に変えようとする方法のことです。この文章では料
理を錬金術にたとえています。両者はどのような点で共通していますか。最も適当
なものを、次の中から選びなさい。

ア 何かを加えることで、みながほしがるものになる点。

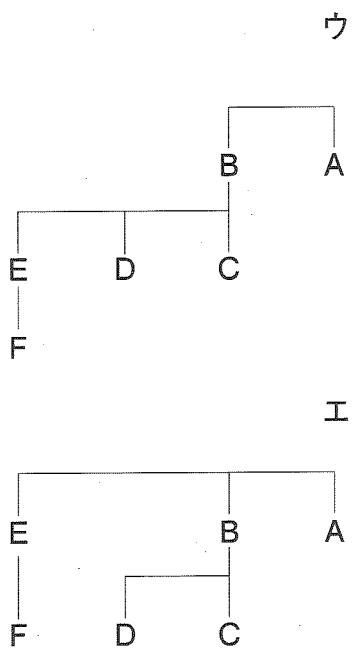
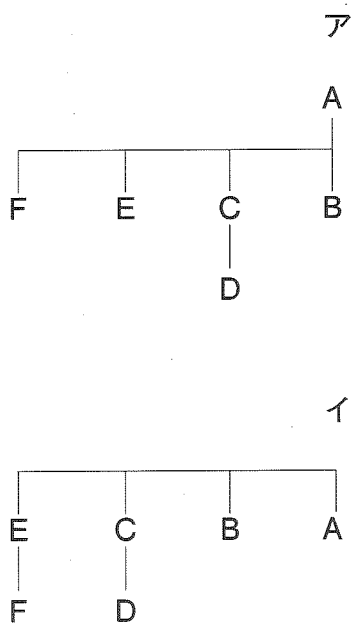
イ 手をかけることによって、よりよいものになる点。

ウ 気づかないうちに、特別な性質のものになる点。

エ 予想外の変化をとげて、価値の高いものになる点。

(3) — 線部②「火を調理に使うのである。」とありますが、この文章ではこの後火を

料理に使うことの利点として、線部A～Fが挙げられています。文章にそってA～
Fの関係を図で示したものととして最も適当なものを、次の中から選びなさい。



(4) 本文中にある語を使って、I . II にあてはまる言葉を考えて書きな
さい。ただし、I は二字、II は三字とします。

(5) —線部③「ちなみに、英語のクック「料理する」という動詞は、火による熱を通すことにしか使えない。サラダを作るのも、刺身にするのも、寿司をにぎるのも、クックではない。動詞はメイク「つくる」を使う。」とありますが、この部分を書き加えられているのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

ア 食べ物をつくる上で、火はとても大きな役割をになってきたということを示したいから。

イ 欧米では、日本よりも火を使って食べ物をつくることが多いということを示したいから。

ウ 英語と日本語では、食べ物をつくることのとりえ方が異なるということを示したいから。

エ 熱を通さないでつくることができる食べ物も、増えてきているということを示したいから。

(6) —線部④「火による調理がなかったら、多彩な食卓ではなく、私たちの脳もなかったかもしれない。」とありますが、リチャード・ランガムがこのように主張するのは、火による調理によって何が可能になったからですか。次の中から適当なものを三つ選びなさい。

ア 硬い生肉が消化しやすいものとなり、消化器に割く必要があった負担の一部を脳へと割り当てることが可能になったから。

イ 硬い生肉を時間をかけて消化する必要がなくなり、同じ体重の霊長類などよりも消化器を軽くすることが可能になったから。

ウ 食べ物が柔らかくなって頑丈な咀嚼筋がいらなくなり、頭蓋全体をしばっていた筋肉の拘束を解くことが可能になったから。

エ 食べ物の中にいる病原体や寄生虫を殺すことができるようになったばかりでなく、美味な料理を食べることが可能になったから。

オ 栄養価が非常に高い食べ物を食べることができるようになったおかげで、多量のエネルギーを脳へ送ることが可能になったから。

カ 消化器が長い時間をかけて食べ物を消化する必要がなくなったおかげで、咀嚼のための時間を短くすることが可能になったから。

(7) 火を使えるようになったことは、ヒトの生活にどのような変化をもたらしましたか。この文章に書かれていることをすべて選びなさい。

ア 食べることに費やしていた時間を、別のことに使えるようになった。

イ 食べられる物が増えたことで、様々な地域で暮らせるようになった。

ウ 太陽が沈んだ後の暗くなる時間も、有効に活用できるようになった。

エ 田畑で作物を育てたり、牛や羊などを飼育したりするようになった。

オ 飢える人や病気になって命を落とす人が、大幅に減るようになった。

国語 解答用紙 (平成二十六年 度)

【三】			
(7)	(6)	(4)	(1)
		I	1
		II	2
			(2)
	(5)		
		(3)	

【三】					
(9)	(7)	(6)	(4)	(1)	
A					
	B	(8)		(5)	
			(2)		
				(3)	

【二】
(1)
(2)
(3)

受験番号	
------	--

(国語)

※記入しないこと
